
雲の上の婆ちゃん家(ち)

rozan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雲の上の婆ちゃん家^ち

【Nコード】

N7918I

【作者名】

rozan

【あらすじ】

『雲の上の婆ちゃん家^ち』

夫亡き後の和実（母）は、幼い昭雄と夏見を家に残したままクラブ店客の外国人と、行方を絶った。途方に暮れる幼い昭雄と夏見はある日、雲の上の家で暮すと言って家から去った優しい稚代（チー婆ちゃん）を訪ねる旅に出た。

やん家ち（山の背景シリーズ）

1

父である雄一が肺癌で亡くなって、稚代（父方の祖母で七十
六歳）と母の和実、長男の昭雄（小学三年生）、それに妹（六歳）
の夏美と四人生活で十年余りが経過した時期だった。

「これからは心機一転、安アパートに引っ越してやり直すわっ。だ
から稚代さんと一緒の生活は出来ないと思っっているの。郷里に帰る
なり一人生活なり、離れた生活を考えてもらいたいんだけど」と、
これまで和実は性格が合わないと思いつながら生活をしてきた稚代と
の決別を、鬱憤を晴らすかのように夕餉を囲む子供達の前で言う。

「チーが何処かに行っちゃうの？絶対に離れるの嫌だよ。チーが何
処かに行っちゃうなんて嫌だっ！」

祖母をチーと呼んでいた昭雄が母に逆らって言い、手に持つ箸を床
に投げ捨てた。

食卓の昭雄の横に坐っていた夏美は、チーをママが苛めているん
だと思いつながら薄っすら涙を浮かべ、口をあんぐりと開けたままで
事の成り行きを見守っている。

「お前達は稚代さんに甘やかされ過ぎたのよ。だから親に反抗ばか
りするようになったんじゃないのっ。父親が亡くなったんだから、
あたしの細腕で生き抜くには邪魔なのよ、解かるっ！」

「夏美ちゃんや昭雄ちゃんのこと、チーは忘れんけえ。昭雄ちゃん
は男だで、夏美ちゃんを守るじゃんけ。また会えるの楽しみみずら
あ」と、稚代は涙を堪えて笑顔で言い聞かせた。

「チー、何処に行くのっ？僕、絶対に付いて行くんだからねっ」

昭雄は和実の顔を伺わずに言い切った。

「昭雄、そんな分からんこと言っちゃよし。アンちゃんらしくしていと、チーは二度と会えなくなるぞらあ」

そう言うものの、稚代は孫の元を離れ難いのが本心だった。

「あんたらっ、構わんから何処へでも付いて行ったらいいわよっ！出来の悪いあんた達なんて、居ない方が清々するわっ！」

懐かない子供達に愛想を付かした和実がそう声を荒上げると、昭雄と夏美は半べそを掻きながら玄關の外へ飛び出して行く。

経済的に困窮しだしたこともあり、高家賃のマンションから安アパートに転居する理由は稚代も理解できていた。それで僅かな年金の中から生活を支えるために精一杯の支援をしてきた積もりの稚代だが、和実の傲慢な性格を溶解するには至らなかった。

2

鰻集落（山梨県の南西部、市川三郷）に稚代の実家があつて、林業を営む雄一の弟夫妻と一緒に稚代は住んでいたのだが、東京の雄一家で昭雄が誕生したということで稚代は和実から昭雄の世話を頼まれた。

それから現在まで稚代は雄一家で同居生活をするようになっていたのだが、その当時から稚代に対して和実の執拗な嫌がらせが頻発していたことで耐え切れず、実家に戻るべきだろうと何度も思いもしたが、その都度、雄一に宥められて引き止められた経緯があつた。だが、雄一の死別を機に和実から出て行くことを求められなくても自発的に出て行きたいのだが、既に可愛い二人の孫達に囲まれていることが生きがいになってしまっていることや、子供達に愛情を注がない和実に一抹の不安を抱いていることも、別居への決断のブレーキになっていた。

家から歩いて三十分程度の距離にある井の頭公園内に、以前、一度だけ奥まった湖水淵に昭雄と夏見は稚代に連れられて来たことが

ある。

お玉杓子や小魚を手の平で掬ったりして遊んだ場所なのだが、昭雄は今、再び夏見を引き連れながらその場所に辿り着いていた。

この日は日曜日の行楽人で賑わっていていた。

昭雄と夏見は設置された空きベンチを見つけると、中央にチヨコんと並び坐つて頂垂れていた。

「アンちゃん、お腹空いても此処にいるっ?」

「夏見はママの家に帰りたいんか?」

「うん。でもお腹すくよっ」

「暗くなればママは仕事に行つて家にはチーしかいないから、おにぎり作ってもらいに帰るよ」

「おにぎり作ってもらつたら、また何処かに行くのっ?」

「うん。嫌なら夏見はママの家にいろっ」

「嫌、ついてく。アンちゃん何処に行きたい?」

「チーの家に連れてつてもらうんだ」

昭雄はそう言いながらも、和実の許しが出ないことは解っていた。

「アンちゃん見て。あれチーだっ」

そう言つて、次第に近づく稚代に夏見は駆け寄つていく。

稚代は呼吸の乱れを整えてから安堵したのか満面の笑みを作つて見せ「やっぱり、ここじゃんけえ。心配したずらあ、昭雄ちゃん夏美ちゃん」と声を掛けた。

昭雄も大声で泣き出すと、夏美もつられるように泣き出しながら「何で此処にいることが判つたのっ、チー」

3

「そりや昭雄と夏見のいるとこぐれえ、チーには判るずらあ」

「もういい、泣かんでいいずら。帰えるで、こつちへこつし。皆、見ているじゃん

け、さ帰えろっ」

そう言って稚代は、骨ばった掌を孫の頬に交互に添えた。

家路に着くと和実の仕事にでも出かけたのだから姿は無く、和実の居ないことを知る泣きべそ顔の昭雄と夏美は、互いに笑顔に変えて見せ合った。

「ねえ、チーは何処の家に行くのっ？遠くっ？どんなところっ？」

昭雄は真剣な眼差しで稚代に訊いた。

「ほんなこん訊いてもしょうがねえら。でも、おらげは山の天辺で雲の上で高けえけえ、昭雄ちゃんや夏美ちゃんのこたあ良く見えるじゃんけ。だで、何時も雲みたらええし、寂しいこたあねえずらあ」「おらげって何なの？」

時折チーの言葉が理解できない昭雄は、その都度チーに訊き返す。

「チーの家じゃんけ」

「うそだあい。雲の上に家なんてないよ。チーは隠してんだっ？」

チーが何かを隠していて、付いてこさせないようにしているんだと昭雄は思った。

「雲の上の家なんて嘘ごいて、謝るずら。でも、富士山の麓で近くには四尾連湖しごめい言つて、標高六百五十メートルだっけが、そりゃ高けえところにある家だで、うんとデツカクなったら遊びにこっし」

「シビレルってなんなの？」

「シビレコや。深い山の上にある大きな池の名前ずらあ」

「魚は居るの？」

「公魚わかさぎなんかも一杯いっぺえ居るら」

「すぐ行きたいよっ」

「昭雄ちゃんチー困るで、ほんなこと言っちょしね。ていげいにしとかんと母さんおこっちょ（怒る）。あら夏美ちゃん、こんとこで転げて寝えるがっ。疲れとおよ」

稚代が和実の家を去って、半年が過ぎ去っていた。

和美は日増しに酔いつぶれて帰ってきたり、癪癪を起こして意味無く昭雄や夏美をセツカンするようになっていたことで、二人は懐くどころか母への嫌悪感が増していた。

夏美は日ごろからアンちゃんと呼んでは甘えていた昭雄に、細々と世話をやいて貰っていた。

「アンちゃん、チーんとこ行こっ」

和美が居ないこともあり、夜は決まってチーの思い出を語りながら眠りについていた。

この夜は、夏美が無性にチーを懐かしんで昭雄にそう言った。

「大きくなると駄目だつて、チーが言つてたぞっ。」

「もう大きくなつたよ。行こっ」

「まだチビだよ。それにチーの家の道、知らんからなっ」

「ブランコ乗つてる時アンちゃん、道、知ってる言つた」

「忘れたよ。でも、シビレル池あるところにチーは居るんだ」

「じゃ行こっ」

「大きくなつたら連れてく言つてんだらう」

「嫌や。馬鹿ばか、アンちゃんは馬鹿や」

こんなやり取りが連日連夜続いていたのだが、昭雄は、甘えて慕う夏美が愛おしくて堪らなかつた。

昭雄は積極的に家事の手伝いをやり、身支度を整えて夏美を幼稚園に送り届けながら小学校に行つていたのだが、そんなある初冬の出来事だつた。

一日中待つても家に和美は戻らず、突如と姿を消した。

5

数日後、外国人男性とアメリカに行つてしまったらしいと言う勤務先の情報を、家の近くに住む和美の友人で康子（和美と同じクラブに勤務している）から、昭雄は聞かされた。

そのことが切っ掛けで、夏美を連れてチー探しの旅に出る決断を

する昭雄だが、何かと家に入出入りするようになって、食事を作ったり世話をしてくれていた康子から「何かしようと思ったら、まずは小母さん（康子）に話してからにしないねっ。お母さんだって一時的の気の迷いに気が付いて、近々帰ってくると思うのよ。それまでは小母さん、あなた達の面倒見るからねっ」

康子がそう言い聞かせてはいたのだが、昭雄の心には響かなかった。

「チーの家に行こうよ、夏美」

昭雄は、アパートの家に居ることが我慢出来なくなっていた。

「アンちゃん、ほんとっ」

「ああ、今から行くから夏美はあの好きな赤いバッグに持っていく物を詰める」

「これも」と言っつて、夏美は何時も抱いて寝るパピーと呼ぶ白ウサギの縫いぐるみを、手で翳す。

「バッグにそんなもん入れたら、他のもん入らんからなっ」

「これだけで良いよ、アンちゃん」

「寒くて風邪を引いてもいいんかっ」

「着るもん、アンちゃんのバッグに入れてったら良いよ」

そう甘える夏美に逆らえずに昭雄はせつせと身支度を整える。そして、仏壇の引き出しの中にお金があることを日頃から知っていたことで、三万八千円の全額をバッグのポケットに詰め込んだ。

一度は康子小母さんに伝えてからにしようかと思いきもした昭雄だが、引き止められることが漠然とながら解かることで、スルーをした。

6

昭雄は夏美と連れ立って、吉祥寺の駅に向かっていた。

冬休みで学生達が多く目立つ駅構内で、昭雄と夏美はうるたえながら、券売機の前で何十分も突っ立っていた。

「坊や達、誰かを待ってるの？」

小奇麗な白髪交じりの中年婦人が訊いてきた。

「うっん。チー婆ちゃん家に行くんだ」

「あらそう、二人だけでっ？」

「うん」

「坊や達、何処まで行くのっ？」

「シビレル山梨だよ」

「まあ、山梨県なんて遠いのよ。シビレルって聞いたことのない駅
なんだけど、冬休みで妹を連れてお婆さんの家に行くのは頼もしい
んだけど、気を付けなといけないわよっ。切符は買ったのねっ？」

「まだ」

「じゃ、小母ちゃんが駅員さんに訊いてあげるから、付いていらっ
しゃい」

世話好きな婦人はそう言いながら、駅員室のドア開け入った。

駅員室に入った昭雄は極度に緊張してドアを背にして、ちじこま
っていたのだが、反対に夏美のほうは、婦人が知り合いでもあった
かのように傍らにピツタリ寄り添って、甘えているようだった。

「四尾連湖のことだろうと思うんだが、子供達だけでは危険で無理
でしょう。最終駅からタクシーで行くことになるんだが、第一そん
なお金お持たされているかね。坊や達」

駅員は夫人が他人だと知って無理ではないかと、昭雄や夏美に言
い聞かせた。

「お金あるよ。これ」

昭雄はバッグの中から二つ折りの裸金を取り出して見せた。

「坊や達の親御さんの意向なら仕方がないなあ。今、解かりやすく
乗り継ぐ駅など書いて上げるから、途中で判らなくなったら小父さ
んに電話を掛けて来なさいよっ」

駅員はそう言って大きな紙に解かりやすく書き、最後の欄に駅員
は名前と電話番号を書き添えた。

婦人は駅員から身延線の市川大門駅まで二人分の切符を受け取り

ながら、肉親のように駅員に深々と、頭を下げた。

7

途中でお腹が透いたら食べなさいと、食品を一杯買い与えられた昭雄と夏美は、涙の滲じむ目で、姿が見えなくなるまで婦人に手を振った。

快速の中央線に乗り込んだ昭雄と夏美は、教えられた通りに八王子駅で本線の甲斐路号に乗り換えていた。

「アンちゃん、小母ちゃん母ちゃんだったらいいね。優しいから」
夏美はバッグの中からパピーを取り出して膝の上に置き、車窓から流れる田園風景を楽しげに眺めながら言つ心の中には、優しい母が居て欲しい願いが充満しだしていた。そして図らずも同じことを昭雄も思っていた。

「夏美、小母ちゃんくれたお弁当たべよっか」

「チーのお土産にしよう、アンちゃん」

「お菓子も一杯くれたから、お土産、お菓子でいいよ」

「じゃ、お弁当食べよっ」

夏美は遠足にでも来たように、家では見られなかった屈託のない笑顔を振りまくが、昭雄の表情は不安で曇らせていた。

夏美は弁当の小さなソーセージを指先で摘み取り、パピーの口元に運んで食べさせようとする。そして二人はうとうと眠りに付きだすと「切符を見せてねっ」と車掌に起こされて「二人での旅なの？」と訊いてきた。

「はい切符、二枚あるよっ。駅の人がこれ書いてくれたから行けるんだ。甲府で乗り換えると書いてあるんだよ」

昭雄はそう言つて紙を広げて見せた。

「そうか、そうかね。気を付けて行きなさい」

車掌はそう言つて笑顔で去った。

甲府駅のホームに降り立つと、知らない駅員さんが近づいてきて「着いたね、おまん達」と声を掛けてきた。そして「おまん達のと吉祥寺の駅員から事前に連絡あって、それで到着待っていたずらあ。身延線へ乗り換えの時間ねえし、せつこんで（急いで）こつちへこうし（来なさい）」

昭雄はチーの話し言葉に似ていると思いつながら、チーを身近に感じ出していた。

「小父ちゃん、チー知ってるのっ？」

夏美は、駅員の物言いが稚代と同じに聴こえてそう訊いた。

「チーってお母さんのこと？」

「チー婆ちゃんだよっ」

「そうかそうか、やさしいお婆ちゃんずらあ。会ったことねえけど、そのお婆ちゃん家に行くずらあ」

「そお、当たたりい。小父ちゃん、おんぶしてっ」

人懐っこい夏美は、駅員にそうせがむ。

「夏美の馬鹿っ！ そんなこと言つと、置いて行くからなっ」

昭雄は夏美を叱った。

「分かった。置いてかないでっ」

「分かったから、早く歩けよ」

昭雄は駅員の案内でホームの最後尾へと足早に歩き出し、後方のホームから身延線ホームが見えだすと、二両繋ぎの車両が止まっていた。そして発車のベルも鳴り出したことで振り返ると、駅員の背には、ちゃっかり夏美は負ぶさっていた。

駅員は車掌に昭雄と夏美の下車駅を知らせて協力を仰ぎ「氣い付けて行けし」と言つて、車両に乗り込ませた。

車窓に額を押し付けながら二人は不思議そうに流れる田園や山の景色を眺めていたが、時折、昭雄と夏美は不安そうな表情で、言葉無く顔を見合わせる。

昭雄は現実感の不安が増大し、心が張り裂けんばかりの不安を抱

きだしていた。

「アンちゃん、パピーの耳、取れそう」

夏美の掌に握り締めていた縫いぐるみを、昭雄に見せた。

「チーに直してもらってから、それまでバッグの中に仕舞っておけよ」
昭雄は益々不安が増幅し、チーに会えなかつたらどうしようなどと、初めて深刻な現実感が胸を締め付ける。

9

市川大門駅に降り立った昭雄と夏美は、絵本のお伽の国に描かれたような色鮮やかな三角屋根の駅舎に、見とれて立ち止まっていた。
「甲府駅の車掌から電話があつたけど、四尾連湖に行くんは、おまん達けえ」

駅前に止まっていたタクシーから降り立った運転手が、昭雄と夏美の前にきて言った。

「チーんところ」

夏美は咄嗟に答えた。

「チーんところって、名前は判るんけ」

「稚代婆ちゃん」

昭雄は極度の緊張をしながら答えた。

「おまん達の名前は？」

「僕、岡崎昭雄、こいつ、岡崎夏美」

「じゃ岡崎稚代って言っんけ」

「違うよ、稚代婆ちゃんだよ」

「判かんねえと、しょうがねえら。兎も角、車ん中へえっっていれし
運転手も車に乗り込むと、無線機で営業所に相談を持ちかけただ。
た。

二十分程、駅前に停車したままで四尾連湖付近の住人探しを依頼していたが、稚代とだけでは判らないとの結論だった。だが、取り敢えず四尾連湖に向かってみることにになり、途轍もない狭い急な坂

道をタクシーはエンジン全開で二十分程かけて登って行った。

御坂山地西端、蛾ヶ岳おびの中腹（標高六百五十メートル）の冬到来は早く、四尾連湖を取り囲む山肌のくすんだ色相は一段と深まっていて、その水面（周囲3キロメートル）を丸く縁取るように、暗く塗り潰していた。

「着いたずら。池に転げてつつべる（はまり込む）と困るじゃん。そけえ（其処に）いれし（居て）。民宿の大将に探して貰うつけえ」と言い残して、車から出て行った。

運転手の深く刻まれた顔皺は黒光りして、運転手帽を被った人相には怖さを感じていた昭雄と夏美は、馴染めずに無口になっていた。タクシーの中で不安げに坐って待っていたのだが、車窓から望む水面は、稚代の話した魚が取れると言うイメージからは程遠く、湖面に近づき難い深いブルーだった。

「お魚掬えないねっ、アンちゃん。でもボートが浮かんでるよっ」「怖いよ、ここ。魚よりチーに会いたいよ」

運転手が稚代を探し当ててくれることを、昭雄は心の中で祈っていた。

「おまん達、降りてこっちへこうし。つつぺるで、とんじよし（走らないで）よ」と運転手が、六・七メートル先の民宿玄関先から、手招いて叫んでいた。

10

昭雄と夏見が運転手のいる民宿の玄関口に行くと、男が運転手に向かつて話し出した。

「岡崎家に嫁いだ稚代さんは二人の息子に恵まれて、その息子たちは其々自立して結婚をしたんだが、そんな時期だったけど、夫が出稼ぎに山を下って久しく時が流れて一時帰郷した亭主から、稚代さんは出稼ぎ先の未亡人と結婚をする為に離婚してくれと、懇願されたそうや。衝撃的な告白された稚代さん、そんな夫に愛想を尽

かしてか、離婚を承諾したそうなんや。そのあと亭主は単身で家を出て行って間もなくやったが、稚代さんはうちん家ちに雑用仕事の手伝にきとうたけ、其の時の事情は良く知ってるすらあ。稚代さん旧姓の安田に戻って次男坊夫妻と一緒に岡崎家で今まで通り生活はしていたけれど、東京で生活をしている長男坊（雄一）夫妻に子供が生まれ、手伝いを依頼されたと稚代さんから、聞いたつた。

長男の家に行くと言った山を下って十年が経過した最近になって、再び岡崎家の次男坊夫妻の許に戻ってきているすらあ。おまんらが長男坊の子供達け？」

そう言いながら、昭雄と夏見の頭を交互に撫でた。

現在、岡崎家に戻っている安田稚代さんだと判明したのである。

車の通れぬ山道を大分登ったところにある家で、電話も引かれなほほど高い場所だと言うことを、運転手は聞き出した。

1
1

日中は自然公園指定の山林手入れをするためだけの休憩所には、作業員の数人が四、五時間だけきていて、その間は無線電話に掛ければ取り次いだり言伝をしてくれるが、今日は時間外で連絡は付かないとのことだった。そこで、この民宿に無料で宿泊して明朝に案内してくれると民宿の人から提案をされた昭雄は、運転手にお金を払い「ありがとう、小父さん」と深々と頭を下げた。

食事も風呂も入って二階の四畳半の和室で寛ぎながら、窓から望む百メートルほど先の山道口を繁々と眺めていた昭雄と夏美だが、「あそこの山道登るとチーの家あるんだって」

昭雄は山道を指先で示して夏美に説明をする。

「今、行こつ、アンちゃん」

「暗くなつたら、お前泣くに決まってるよ」

「まだ、明るいよっ」

「暗くなると、お化け、怖いんだぞっ」

「お化けなんて、いないんだもん」

「居たらどうすんだ」

「パピーと一緒にやつ付けるよっ」

夏美は気丈な一面を覗かせる会話をしているうちに、昭雄は稚代の笑顔がチラツキだしていた。

1
2

昭雄と夏美は我慢出来なくなって民宿の裏庭にこっそり出ると、暮れなずむ山道を目指して走り出した。そして息を切らして山道口の切り株に腰を下ろした夏美は、バッグからパピーを取り出して、チーに痛痛を治して貰うからね」

夏見は縫いぐるみの頭を撫ぜながら言う。

「怖くないって言ったんだから、本当に泣くなっ」

昭雄は夏美に念を押し、なだらかで左右に蛇行して見える山道を登り始めた。

樹木に覆われた長いトンネル状の暗い山道を逃げるように駆け抜けると、月明かりだけの仄ぐ山道が蛇行して山肌に這い登っているように、霞んで見えているだけだった。

周辺を見回しても家らしき建物や明かりなどは一切視野に入らず、恐怖の中にいた。

握る夏美の手は汗ばんで、気丈だった筈の目からは涙が滴り落ちた。

昭雄は心の中で泣くなと強がって見せたいが恐怖心で声が出ず、ひたすら夏美の手を力強く引っぱるばかり。

「痛いよ、アンちゃん」

夏美の声で我に返った昭雄だが「怖くないよなっ、夏美」と、自分に言い聞かせるように細い声で問いかける。

「へっき。チーが雲んここで見てるから。あっ、アンちゃん、あそこの暗いところ目が光って動いたよっ」

「夏美、逃げよう」

昭雄は恐ろしい獣かもしれないと思い込んで、脇の細い平坦道に夏美の手を掴んだまま、無我夢中で走り込んで行く。

13

病院のベッドで目を覚ました昭雄は、何が起こったのか直ぐには思いつかないでいたのだが、頭部に何重にも包帯が巻かれていることに気付いて、夏美は何処に居るんだろうと我に返りだした。そして半身を起こそうとした時だったが、稚代が車椅子に坐る笑顔の夏美を押して、昭雄の病室に入ってきた。

「昭雄ちゃん気がついとお。良かった良かった。おまん達のこと、ちつとも解かってあげんで謝るけえ。辛い思いをさせてしもつて、ご免よっ」

稚代はベッド上の昭雄の傍らに車椅子を寄せて、昭雄の掌を握りながらそう言った。

「アンちゃん、痛くないっ？」

夏美は昭雄の痛々しい頭の傷が、心配だった。

「お前こそ、どうしたんだよ？」

昭雄は車椅子に坐った夏美の包帯を巻いた足を見て訊いた。

「おまん達、一緒に崖から三メートル下の川原に落っこつて、昭雄ちゃんは何かに頭ぶつけて意識なくなつていたと言っじゃんけ。暗闇の中で昭雄ちゃんの頭を膝の上に抱えて必死に守つていた夏美ちゃんも右足首を複雑骨折していたと聞いて、婆ちゃんが悪かったつて、泣けてなけて……」

稚代はそう言うつと、止め処も無く流れ出る涙を拭おうとはしないでいる。

「チー泣かないでっ」

そう言うつて、夏美は稚代の手を握る。そして再び「民宿では大騒ぎになって、ご主人は地元の男集と明かりを持って脇道も探しながら

ら登って行つたんだと。それで山の中腹辺りで子供用の赤いバッグが落ちていたのを見て、仲間を無線機で呼んで付近を手分けして探し回ったと。それで脇道奥の崖下に落つこちているおまん達を見つけて助けたとっ」

稚代は、そう勇敢さを称えるように、夏美の頭を撫でた。

「助けてくれたんか、ありがとう、夏美」

昭雄は、不思議そうな眼差しを夏美に向けて言う。

「違ふよ。助けたのパピーだもおん」

そう言う夏美の膝の上に抱え込んでいるパピーの長耳は修復されて、きれいに甦っていた。

「夏美ちゃんは『アンちゃん早く治して』と言って、昭雄ちゃんを崖上に担ぎ上げられるまで、独り暗い茂みの中で堪えて見守っていたともきいたずらあ。夏美は勇気ある子や」

フィクション

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7918i/>

雲の上の婆ちゃん家（ち）

2011年6月3日19時25分発行